

〔文化財報告〕

昭和43年度 千葉市指定候補文化財報告

千葉市文化財保護審議委員

和田 茂右衛門・宍倉 健吉

I 花島町・花島觀世音像について

千葉市花島町60番地にある觀音堂は、和銅2己酉年(709)4月、行基菩薩が東国巡錫の折、当地に至り、桜樹を以て7尺5寸の十一面觀世音の像を彫刻して、一字を建立。これを安置して、初め「雲谷山天福寺」と称し、後に「花島山天福寺」と改めましたが、これが「花島觀音」のはじめだと思います。

堂宇は、5間四面、三方に廻廊をまわし、山門に祀られた仁王尊像は運慶の作だと伝えています。ことに今は、本堂に所蔵されている船板に「龍遊軒」の3字を彫刻した額があって、これは、慶長6年(1601)、時の頭領・遠山四郎兵衛の寄進で、宇は徳川家康の自筆だと伝えています。

山門に向って左脇に、山のよう草葺(わらじ)が奉納されていて、山門にも鉄製の草鞋が奉納されていますが、これはどういう信仰から来たのか、一般には、道中安全を祈るとか、遠方から訪れる神をもてなすとか、村境の「道切り」などといわれております。また、仁王門などに大きな草鞋が奉納されているのがよくみるが、これは外来の悪魔疫をさえぎる、あるいは「山の神」に草鞋を奉納するところから考えて、「山の神」が里に降って、「田の神」なるものに奉納する。そして、五穀豊穣を祈願する。それから変化して、觀音様に悪魔を退散させてもらい、身の安全を祈願したというものでしょう。

ここに、民間信仰の神秘さが隠されているのではないかでしょうか。この堂宇には次のような資料が残されています。

寛文11辛亥年、下總國千葉庄花島觀音開帳ならびに再興勧進序

慶長17年5月18日、觀音堂再建の棟札

慶長6己卯年、遠山四郎兵衛寄進の御船板

享保10乙巳年9月10日 十一面觀世音ならび

に金剛力士の棟札

文政7甲申年10月18日、本堂入仏開眼供養の  
棟札

なお、觀音堂の西方に天福寺というお寺があつて、再興勧進序によれば、別當天福寺とありますところからみて、觀音堂は天福寺の境内仏であつたと考えられます。寺と觀音堂の間の民家は、もとは境内地で、觀音堂の周囲は池であつて、そのうちの島へ觀世音を祀られたのでしょうか。ですから、觀音堂はすなわち天福寺ではなく、觀音堂の別當寺として天福寺が出来たと考えることは当然と思われます。

さて、本尊は、勧進序および棟札には、「十一面觀世音」とあるけれど、現在の本尊は聖觀音です。いま、県文化財室の郡司幹雄先生にみていたとき、その報告を頂戴したので、ここに引用してみます。

これは、木造聖觀世音立像で、カヤ材を使用され、素地(白木造)の一木造である。

両腕は肩の付根で別材ではぎよせてあり、右手は手首より先を更に別材を以てはぎよせ、左手は前脚部より先を更に別材ではぎよせてある。両足先も別材ではぎよせてあって、膝部は耳後で頭頸から地付まで前後二材ではぎよせられて、頭部から地付まで中ぐりを施してある。

白毫は水晶を嵌入せられ、彫眼で、眉黒目ひげおよび地顎髪のはえぎわ等を墨書きにし、口には朱を塗っており、耳孔をうがっている。

寸法 像高 229cm、肩巾 68.5cm

面長 260cm、腰巾 48.6cm

面巾 223cm、裾巾 52.0cm

面奥 120cm、体奥 40.0cm

一木造りの構造で、すね部の衣に龜波の名残りのような衣文の彫みがあり、彫眼で、髪は毛筋を刻していないなどは古様であるが、天冠台はゆるい波形をなし、面は面長で、裳は宋朝朱を帯びたところなどは時代の降下を示すもので、

製作は、鎌倉末期か室町時代であろうかと考えられる。体部が少し扁平のようで、いま少し体奥が多くてもよいと思われる。

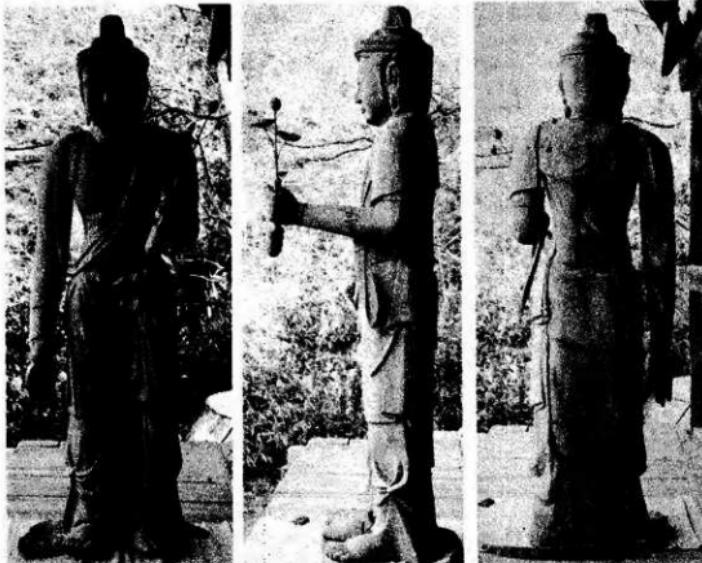
阪東三十三番のうち、番河の觀世音、笠森の觀世音、また立木の觀世音のように大きく、阪東三十三番の觀世音はいずれも大きく、これが関東地方における一つの流行であったかも知れない。新阪東三十三番の觀世音も旧阪東三十三番の觀世音をまねて造られたものか、当寺の觀世音も丈高く、茫洋とした素朴な御影である。

以上、都司先生のお話を聞いて書き付けたものですが、私の聞きたがり書きがいもありうかと思います。その点は私の責任ですからお許し下さい。  
(昭和3年2月10日 和田)

## II 登戸町・登渡神社の 彫刻物について

千葉市登戸町に鎮座する登渡神社は、正保元年(1644年)9月、千葉家の末孫・登戸惟之介平定風が祖先追善のため、千葉妙見寺の末寺として、「白蛇山真光院定風寺」を創建。境内に妙見社を祀り、一堂を建立し、定弁をして祭祀を司らしました。これが、明治の神仏分離の際に、真光院は廃寺となりました。時の住職は14世圓風の時でした。慶応3年(明治に改元)12月26日、妙見社が登渡神社と改めて、今日に及びました。

いま、定風という人はどんな人かというと、明瞭にはわかりませんが、祖先の追善のためとあれば、当然、千葉家に関係のある人ということはできます。そこで「千葉大系図」で調べてみると、千葉重風の弟・七之介定風と称する人があって、天和3丁巳年(1617)に生まれて、慶安2己丑年



花鳥觀世音像：左）正面、中）側面、右）背面

(花島町・天福寺藏)

(1649) 正月11日、33才で死亡しています。いま一説には、定胤は重胤の子供とする系図もあります。

現在の社殿の改築は、安政年中淨財500両を集めて建築をはじめ、嘉永3年6月ごろ完成したものです。葛飾郡八木村の大工・紋次郎を棟梁として造営せられました。この大工・紋次郎は、安政2年には千葉寺をも建築しています。

この社殿に取付けられている小間板の影刻は、当時、妙見寺再建のために招かれていた、信州上諏訪の名工・立川内匠と四郎富昌の作品と伝えられ、その影刻の下図がかつて登渡神社に所蔵されていたが、いまはそれが見当らないそうです。

取付けられている影刻は、十二支の内、子、丑、寅、卯、辰、午、申、酉、戌、亥の10個で、已是「天御中主命」と書いた額の裏になっており、それと半とが、後年なんらかの理由で掛けかえられております。時代的にも製作の技術面からみても相異しています。此の十二支は、堂宇の四面の長押上板欄間にめこまれています。

このほか、松に鷦のたばさみ、鳳凰の懸魚、向拝柱は妙見形彫がほどこされ、唐破風の向拝の蛙股がわりの唐人岡、向拝のケタの若葉と龍の影刻、ケタ、紅葉受けの松と鹿、渡の體形、木鼻の獣子、雲と龍の影刻、いずれも、ノミ、刀のあたりと圓案圓柄が妙見寺(現千葉神社)に残された影刻物と比較して、非常によく似ている。とくに、紅葉の若葉は立川の特徴がよく出ていて、影刻と組物の調和はすばらしい出来具合です。以上からみて、これらは立川の作品に間違いないと考えられます。名工立川の作品なればこそ、文化財として重要なものと考えられます。

(和田)



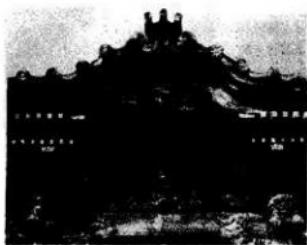
小間板影刻「丑」



小間板影刻「寅」



小間板影刻「酉」



登渡神社本殿向拝の蛙股代り唐人影刻



小間板影刻「亥」

### III 生実町・重俊院 森川氏累代碑について

森川山重俊院は、生実町1158番地にある曹洞宗で、生実庵主・森川氏の菩提寺である。寛永年中領主2代森川重政が幕府に請い創建せりといふ。市内唯一の大名の菩提寺である。

森川氏は、所領わずか1万石であったが、初代重俊は從四位老中となって以来、代々從四位下、寺社奉行、大阪定番等幕府の要職に就いていた。12代慶方に至り明治維新にあり、廢藩置縣によつて生実系知事となる。その子恒（ひさし）は、正三位子爵を授けられ、義理するに及んで從二位を賜つた。

墨城は仏殿の背後1156番地にある。仏殿の左側にある寂定門はその入口である。正面土組に初祖3代の碑を据え、右側と背後に歴代の碑その他一族の碑を建つ。その数併せて47基に及ぶ。初代の碑は組上の正面にある。高さ50cm、台上に立つ碑の高さ28m、巾1m、厚さ30cmを測る。歴代の碑はことごとく初代の碑にならう、いずれも泰然として起立し、その情景は他の墓地に類をみざる偉觀である。この整然雄大なる墓碑群は、当然、文化財として保護する要ありと認める。ちなみに歴代の墓碑銘を列挙しておく。

#### 〔歴代の墓碑銘〕

##### 初代重俊

並時寛永壬申年正月廿四日

損館重俊院殿前羽州大守銘正英大居士 神祇

源朝臣 森川重俊公

##### 二代重政

寛文三癸卯曆正月念三日

損館一鑑院殿前伊州大守元徵全照大居士 神祇

源朝臣 森川重政公

##### 三代重信

寛永三丙戌年六月七日

覚林院殿月窓如閑

前羽州大守源朝臣重信

（宝篋印塔）向て右側

法号 覚林院殿前羽州大守月窓知閑大居士

##### 四代重胤

延享三丙寅天正月十四日

英焯院殿前大居士前出羽入道一之顯光大居士

源朝臣 森川俊胤公 神祇

##### 五代俊常

享保十九歲甲寅六月二十八日

功金院殿前朝散大夫忠林玄心大居士 神祇

源朝臣 森川俊常公

##### 六代俊令

天明七丁未歲五月十六日

不二院殿前朝散大夫天無開善應大居士 神祇

源朝臣 森川俊令公

##### 七代俊孝

天明八戊申歲六月十六日

泰崇院殿前紀州大守貴元隆道大居士 神祇

源朝臣 森川俊孝公

##### 八代俊知

天保九龜合庚戌秋七月三十日

德潤院殿前朝散大夫謹忠宗茂大居士 神祇

源朝臣 俊知公

##### 九代俊民

安政二乙卯年九月二十九日

雄月院殿前羽州大守德山合章大居士 神祇

源朝臣 森川俊民公

##### 十代俊位

安政五戊午年六月廿二日

兼泰院殿前羽州大守徳山公賢大居士 神祇

源朝臣 森川俊位公

##### 十一代俊德

文久二年庚午年九月三日

玉應院殿前羽州大守 真空靜繁大居士

源朝臣 森川俊徳公

##### 十二代俊方

明治十年丁丑

徳光院殿文譽仁興俊芳大居士

十有一月七日

##### 初代重使室碑

寛文六丙午崩

掩社宗化院殿洞泉永中大姫淑位

十二月十有九日

##### 二代重政室碑

正保二年

円通院殿性空妙真大姫（宝篋印塔）

六月廿三日

##### 二代重政の長子重綱碑

霧心（無縫塔、重綱は上総五井の領主、重政

病弱にして家を嗣がず仏門に入り鄭翁と

称す)。

法号、自得院殿月瓈廓心大居士  
享保二年十二月六日卒

三代重信室碑

元禄三庚午年  
実相院殿真如不空大師  
八月十有二日

三代重信の弟重高碑(二代重政の三子、室法号榜)

元禄六年癸酉十月十二日

清露院殿前野州大守風山彦徹大居士 神承

源朝臣 森川重高公

初代重俊(左)および重俊室  
(右)の碑

本堂の裏手にある塀門をくぐると、一段小高いところに墓地がある。その正面に、初代重俊夫妻の墓碑が立っている。

初代重俊次子重名碑(上總師崎三千石、覺林院右)

寛文六丙午年僅月初八日

損館不退院殿有総州大守鉄桂英肝大居士 神祇  
源朝臣 森川重名公

このほかに、姉崎僧主俊央、俊因、俊清、俊世、  
俊朝等一族の碑がある。

(穴倉)



二代重政室の碑(宝鏡印塔)



森川山重俊院(山門より本殿を望む) (沢本吉則氏撮影)